



祐介の目

大田ゆうすけ
(福山市議会議員)

No.48

毎月1日号に掲載

戦後70年に思う

この7月、著書「永遠の四一」

を読まれたご遺族及び私の息子とフィリピンのレイテ島・慰霊巡拜の旅に出た。歩兵第四連隊の通信中隊長だった中村鎮^{いけひろ}、大尉と速射砲中隊の砲手だった金本末太郎曹長のご遺族、計7名をご案内した。

今回の旅のポイントはレイテにおける二人の足跡をほぼ完全に辿り、当時の戦場跡で二人が戦った状況を解説できた事だ。出発前に県庁の社会援護課に軍歴照会を行い、生前の日記を解読し、写真を整理して準備をした甲斐があった。これで中村家と金本家に埋もれていた歴史が再発見され、先祖に祖国のために戦った武士^{もとのぶ}が居たという事が語り継がれる事だろう。

ところで毎年のようにフィリピンに行くと、アジアにおける国際情勢の変化がよくわかる。フィリピンは1987年に核兵器の持ち込みを禁止する新憲法

を制定し、在比米軍基地を追い出すことに成功した。しかし、それを見越したかのように中国が南シナ海に侵出し、南沙諸島の領有権を主張して、軍事基地化している事は周知の事実である。これは沖縄米軍基地と尖閣諸島の問題における教訓と言えるのではないか。

先の大戦で日本兵50万人、フィリピン住民は100万人が犠牲になったと言われる。住民の犠牲者の大半は米軍の砲爆撃の巻き添えであったが、日本兵に殺された住民も少なからずいた。そして戦後、BC級戦犯は数百人を数えたが、妻子を殺されたキリノ大統領の特赦により多数が死刑執行を免れた。大統領の「日本とは今後は友好関係を築く必要がある。そのために赦しをたきを赦す」という決断で、日本国民挙げて感謝したという。

今夏、アキノ大統領は「日本は揺るぎない、信頼できる仲間」と語り、アメリカが世界の警察官を返上しつつある現在、南シナ海の秩序の守護者としての日本への期待は大きい。もしフィリピンが対中関係において支援を求めてきた場合、前記の日記間の歴史を思い出し、集団的自衛権について熟慮すべきだろう。